



事業拡大の局面でも 飼養管理の基本を徹底

農場の規模拡大と生産性の高位安定

今回取材した農場は、大分県で母豚800頭規模を飼養する一貫経営の生産農場である。2016年より母豚450頭規模から、現在の規模へと拡大し、取材時点で肥育豚までほぼフル生産体制に移行している。生産成績の高位安定を維持しながら、規模拡大を実現している飼養管理事例を紹介する。

《農場データ》
所在地：大分県
飼養頭数：800頭
従業員数：10名(パート含む)



里子法で一頭あたりの平準化を図る



洗浄後の豚舎

規模拡大による受入体制の強化

この農場は、ハイコップSPF種豚を用いウイークリー管理※を行うSPF農場である。年間出荷頭数を従来の約1万1000頭から2万頭へと事業拡大を目指しており、既存豚舎の改修とともに新豚舎の建設を行った。

最終的には、分娩舎2棟・妊娠豚舎1棟・交配舎1棟・子豚舎4棟、肥育豚舎10棟(オガ粉豚舎6棟を含む)に再編成された。再編成後の分娩舎・子豚舎・オガ粉豚舎では、オールアウトによる洗浄・消毒を可能としている。

実際には、まず敷地内の旧牛房施設を利用して、肥育豚800頭収容可能な肉豚舎3棟を活用し、肉豚の受入体制を整えた。次に、肉豚を移動させて空舎となった旧肉豚舎を、分娩舎・妊娠豚舎・交配舎へと改造して種豚を移動させた。更に、空いた旧分娩舎を子豚舎へ改造する事で、子豚の受入体制を増強していった。

里子法を活用

同農場では、ハイコップSPF種豚が多産系母豚に移行し産子数が増加傾向の中、いかに出荷までつなげていくかを追求、管理を徹底している。

現在、1母豚あたりの総産子数の平均は約13.5頭で、正常産子数は約11.8頭だが、20頭程度産まれる事もある。この子豚の離乳頭数を高位安定させるために、母豚の授乳頭数を平準化を重視し、1腹あたりの哺育頭数が11〜14頭の範囲とな

※31ページに用語を解説

図1. 離乳頭数/5カ月前母豚数

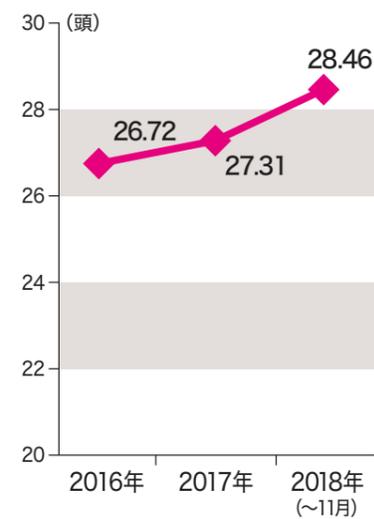


図2. 平均出荷日齢

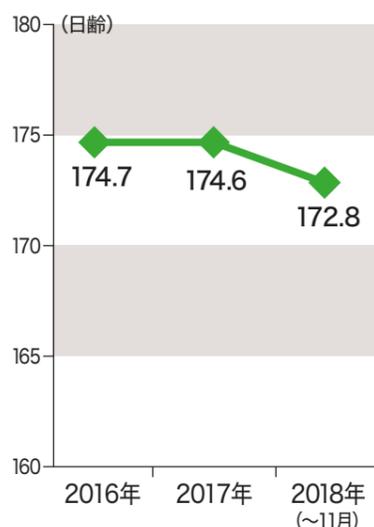
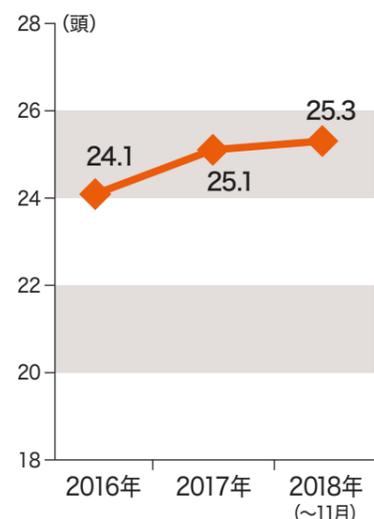


図3. 出荷頭数/10カ月前母豚数



るように里子法を導入している。

具体的には、母豚の泌乳能力を見極めて分割授乳により初乳の摂取を徹底し、廃用予定の母豚を活用して里子に出したり、1週間授乳した子豚のうち大きめなものを、先に離乳した別の母豚の里子に出し、新たな子豚を里子として受け入れるなどの工夫により平準化を図る(写真右)。こうして全体の離乳日数は21〜28日間となった。

また、全体の哺乳頭数の約1割程度を人工哺育している。分娩約2週間後、哺乳中の大きめの子豚を1〜2頭引き抜き、空房の分娩房に移動させる。先行して離乳させた子豚を「餌付け用人工乳」で哺育し、授乳母豚の負担軽減にも取り組んでいる。

オールアウト時の徹底洗浄

衛生面では、分娩舎は部屋単位のオールアウト時の洗浄消毒の徹底に加え、日常の洗浄を行っており、分娩舎の通路は常に清潔を保っている。また、資材なども不要不急な物を通路に置かず、保管場所の整理整頓が徹底されている。農場を清潔に保ち続けるという基本的な管理そのものにより、従業員の意識向上に努めている事がうかがえた。

離乳頭数は、2016年(規模拡大前)の26.72頭と比較し、18年は28.46頭と高位安定しており、農場ではこの離乳子豚を肉豚出荷頭数の向上につなげていきたい考えだ(図1)。

新設した6棟のオガ粉豚舎では1棟あたり400頭の収容能力がある。棟ごとのオールイン・

性別の特徴を活かした飼養管理

経営面では、出荷頭数の増加や上物率の向上が重要であるため、クラウド型養豚生産管理システム「WebPICS」を積極的に活用。集計を常に直しながら、今取り組むべき課題を客観的にチェックしている。

一般的に去勢豚は雌豚より発育スピードが速く背脂肪が厚くなりやすい。そのため同農場では、斉一的な成長を促すため、以前より離乳時以降は雌と去勢に分けて別飼いをしている。今回の豚舎再編から、去勢は旧豚舎(発育速度を適度に抑える)、雌は新豚舎(衛生レベルが高く発育速度を改善)にて飼養する。これにより平均出荷日齢が174.7日から172.8日へと短縮された(図2)。

現時点での平均出荷頭数は、1母豚あたり16年の24.1頭から、25.3頭へと改善(図3)。母豚の産歴構成の中では、まだ初産の割合が多いが、後に適齢産次構成となった際には繁殖成績もピークを迎え、子豚舎・肉豚舎がフル回転になる。各豚舎でのオールイン・オールアウト体制や空舎期間の維持、最適な生産体制により生産性の向上を図る事が今後のポイントであろう。